愛の友協会後援会長賞

梁瀬七々葉様/愛媛県/18歳/女性/高校三年生/父にあてた手紙

世界一の料理人へ

梁瀬七々葉

私があなたのもとに生まれてもう18年が経ちました。ここまで育ててくれてありがとう。いつも馬鹿なことばかりして怒られていると思う。

そのそばで呆れることなく、ずっと同じ笑顔で笑ってくれるところが大好きです。

小さなころから大好きでどこに行くにもついて回っていたね。私はあなたに沢山のことを学びました。初めて包丁を握った日、不器用でへたっぴな包丁使いもびっくりするくらい踏み台が私の宝物でした。背の低い私専用の小さな褒めてくれました。失敗しても褒めてくれることが嬉しくなって毎日厨房に遊びに行った。食材や香辛料、調理方法まで教えてくれて本当に嬉しかったよね。仕事の邪魔になるのに一つ一つ各国を旅してきた話をしてくれる姿はとても生き生きしていて本当に格好よく見えました。

料理のことだけでなく世界中を旅した私は憧れました。料理を学ぶために世界中に立ち続ける背中に毎日休まず厨房に立ち続けるすごく嬉しかった事を心配なく面接も終わり就職が決まった事を聞いてくれました。無事に入り、朝から夜まで部活に打ち込む私と部活に打ち込む私は高校生になり、バレーボールに打ち込む私。少ない会話の中で盛り上がるのは料理の話でした。進路決定が近づく高校2年生。「寿司職人になる」初めて自分の将来の事を話した時、あまり喜んでくれなかったことを今でも覚えています。でもそれは、この仕事が中途半端な気持ちではなかったことを、あなたが一番わかっていたからです。それでもやりたいと強く言い続けるあなたの会話は、少しずつ減っていきました。そんな距離感のまま私は高校生になり、バレーボールに打ち込む私と頃、私は中学生になりました。バレーボールに感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始めるなり厨房で2人並ぶことが窮屈に感じ始める

今までそんな話が大好きでした。

お父さん